

近代外交史三つの視点への試論 (一)

——十字軍から地理的世界発見へ——

北 島 平 一 郎

目 次

は し が き

序

1. 地理的世界発見

2. 中世国家、近代国家

3. ギルド

4. 市民社会と教育

5. マックス・ウェーバーと井原西鶴

一、イスラム世界と十字軍

セルジュック・トルコ

ウルバン二世

イスラム圏

十字軍

十字軍の終焉

二、大陸の争闘と海への転回

オットマン・トルコ

十字軍の動機と目的 (1)

十字軍の動機と目的 (2)

十字軍の動機と目的 (3)

東西世界三つのルート

三、大洋からアフリカ、アジア、アメリカへ

ヘンリー航海王子

ジョン二世、ディオゴ・カム、ディアス

バスコ・ダ・ガマ、コロンブス

法王境界線

コロンブスの第二回航海

マゼラン

あとがき

近代外交を展開する近代国家の成立には種々の要素がある。これにつき考究したいのが小論の目的である。その概要については、「序」にややくわしくのべた。「序」に従って考えてゆきたいと思う。問題は広く大きくまた複雑であることはいうまでもない。どこまで筆者の努力が通じるかは甚だ疑問である。これにつき大方の御教示を仰ぎつつ考究をすすめ得れば、筆者望外の喜びである。

序

1. 地理的世界発見

近代外交史が求める近代外交に関する中心の三つの要素について考えてみると、それは①国家が近代化する為に必要な経済的發展―この場合は、即ち資本主義的發展―であり②これをなすとげる為に必要であった本源的蓄積を可能にする植民地の建設と開発、マーカンテリズムによる勢力圏との交易―時には海賊行為も含む―であり、そしてこれを元とした③国内経済の膨張を土台とした国家の近代的統一である。そしてこれは、また更に植民地の外縁を広げて、尚多くのそして広いそれらを獲得しようとする外交政策の發展となつてゆく。

これらの事象は、社会が欧州の領域に限られていたときには勿論不可能であった。これを可能にする為には欧州を世界に押し広げねばならず、そしてこれを成しとげたのは、所謂地理的世界発見の運動であった。バスコ・ダ・ガマやコロンブス、マゼラン等がこれを遂行した。彼等は欧州（スペインとポルトガル）から地球を東に西に航海して欧

州にとつての新天地にゆき―それが地理的発見であるが―、そこに植民地を打ちたて、商業、交易の拠点をつくり、彼等自らは、種々の物産を多数の奴隷を含めて本国に持ち帰った。地理的世界発見という世界文明史上の画期的な大事業―種々様々の困難を克服した冒険―は経済的には、その内容としてこういった実態をそなえた一大征服事業であった。そしてこれが近代資本主義発展の本源的蓄積の土台を培った。これなければ国家の近代化はなかつたといつて過言ではない。ちなみにこの植民地建設の波は一七世紀には、次の如くなつていた。スペインは中米、フロリダ、南米太平洋岸。英国は、所謂北米一三州。フランスは北米五大湖から北東海岸線への地域と同所からミシシッピ―河沿岸地方。ポルトガルは、ブラジルの東海岸地方、アフリカ、アンゴラ、希望峰、モザンビーク。オランダは、南米スリナム、セイロン、現シンガポール地域、スマトラ南部、ジャバからチモールへの諸島、サラワクからボルネオの南東部海岸線地帯、セレベス、ニューギニア北西部ベラン半島等。

そしてこの地理的世界発見―いまのべた意義をもつた―が起つたのは、十字軍の失敗のたまものであった。即ち十字軍が二百年にわたる猛威を中近東地域―主としてはイスラエル、エルサレム、ベツレヘム―に振つた後イスラム勢力の為に最後敗退して、十字軍とキリスト教のすべての痕跡を一掃されてしまつた為起つたことであつた。東方との交易、地中海貿易といった活動がこれで一大頓挫を迎えてしまつた。現実には、あれ程日常生活に必要不可欠なスパイスも入手出来なくなつた。イスラム勢力は中近東を抑え、キリスト教とイスラムの戦いは言う迄もなく命をかけた魂のそれで、そこに何らの仮借も思惑も無い。キリスト教徒は、一人も陸路を通過して東方へゆけなくなつた。そして地中海からエジプトを抜け、紅海を通過してインド、東南アジアに向う所謂「海の道」も今やたどるによしなき―これが最も痛手であつたが―まぼろしのそれとなり終つた。欧州の夢、東方のどこかにキリスト教の支配する王国がある。

そこには金が産出する。その国と欧州のキリスト教国が同盟して世界をキリスト教化する。それと共に金を獲得する——といったそれも今や現実味を帯びた欧州のロマンとして語れなくなった。

これが欧州の人々を大洋へかりたてたのである。通交の利益をゆるがせに出来ない。金の入手も放棄出来ない。東方のくさぐさのロマンに満ちた産物も放棄してしまうにはあまりにも価値が高すぎた。こうして人々は、大洋に向ったのであった。陸路をふさがれたら大洋を廻ろう。この時期、地球は円形であると説く漸く現実味を帯びていった。プトレマイオスの地理書や数学、天文学が普及しはじめ、トスカネリの世界地図の創造が、これに決定的となった。こうして人々は大洋に出、円い地球を東から西からまわりはじめたのであった。世界をキリスト教化しよう。キリストの福音を伝えて人々の魂を救済しよう。これが旗印であった。十字軍失敗の後にも十字軍の精神は、依然人々の間に赤々と燃えていた。

2. 中世国家、近代国家

十字軍の失敗と地理的世界発見（近代国家三つの要素の大前提）で世界文明史は極端な変革を蒙る。欧州の外延は世界に広がり政治、宗教、社会、思想、科学、技術等あらゆる分野で画期的な変化が起り、新しい文物が開発され、導入された。これらの変革の中、第一のものはキリスト教世界観のそれであった。聖書の教えに対する疑問であった。これがひいては、カソリック教に対する疑問と反抗となる。実に大事件の生起であった。人々は世界に乗り出して、改めて地球の広大を思い、そこに疑問がわいた。即ちこの広大な地球、そして宇宙、天を聖書の教えによると神は六日間をつくったという。そんなことがあり得ようか。はじめに光をつくり、天をつくり、陸をつくり、海をつくり、

動物をつくり、植物をつくり、そして最後に人をつくったという素朴な物語りに対するはじめて起ってきた疑いであった。この疑いが、種々の部面で、科学的探求となつて根を張る。コペルニクスの地動説は一五二一年に出版され、ガリレイがこれを数学的に確定する。人々が大洋に乗り出して東し、西しする真只中にこれらが現れた。人は猿科に属する動物であり、人はこの中で最も発達した属に当る、という説は、賛成、反対の二つの極端に人々を分類し、教育現場でこれをとなえた教師が逮捕されるという様な大騒動も引起された。

これが宗教改革の運動となり、この為には宗教戦争の勃発となり、これが各国に広がる。このとき国家は、王国が常態で王が君臨し統治していた。宗教は国家生活の根幹の一つで、實際上ほとんど国教がきめられていた。王の宗教が国教であった。これに従つて国全体の宗教が統轄されていた。ここで国教と異なる宗教が導入されると、国教と新宗教の争闘が必然的に起つた。また国王が新宗教に変わることもあつたが、国王の代替りで国教が変わることもあつた。この場合は、大変動で、旧宗教と新宗教の争いが起り、王はこれを統轄しようとして大弾圧が起つた。これは、現今国家体制と極端に異なる中世国家の一特色である。このとき欧州はキリスト教カソリックで、宗教改革の結果興つてきたプロテスタンチズム（ルッター派、カルビン派、ツィングリ派等）との相克がくりひろげられ、この中から近代資本主義の思想をはぐくみ、またそれを開放する契機が生じるのであつた。

中世国家は軍事国家であつた。戦争が常態で、その脅威が常に国家生活をおおつていた。国家体制は、王を大将とする階層的軍隊組織と考へて大過なかつた。王の役割は大きく三つあると考へられた。即ち①軍の支配、②公正の維持、③教会（宗教）の保護、であつた。こうした組織に命令系統以外、他の機能の入りこむ余地はなかつた。近代国家への様相を強める段階の国家体制とはまた根本的に異つていた。後者は、統治制度として王、行政事務 (civil

論

説 service, bureaucracy) 立法府 (Legislature) があり、社会階級として官僚 (universal class)、農民 (地主、農民)、

実業家階級 (business class) があった。立法府に王は一人格のそれとして代表され、官僚は行政大臣に代表される。その他の階級は、議会 (二院 Parliament; Estates-Assembly, upper house and lower house) に拠る。上院は土地貴族から構成され、下院は実業家階級に占められる。こういった国家組織であった。中世国家はこれと全く異なり、殆んど王の命令によって事が決せられ、実行されたといつてよい。王は古法にのっとり、国家をおさめ、重要事項や、臨時的事項には、王の重臣 (貴族) が相談にあずかる仕組みであった。しかし彼等は王の意思を決定する役割を演じるのみであった。王の命令は、法令又は法令集 (capitulary) として發布され、王の官僚に伝達されてその内容が実行された。内容は、王の財産の管理、教育の改良、領土の組織、教会、国家に関する事項、王の公的私的事項等であった。王家にはその他執事、召使頭、大会堂牧師、書記官等が属していた。この書記官から後に種々の行政的高官 (chancellor) が生れることとなる。帝国管轄下の地方へは貴族が派遣せられ、司法的、軍事的、財政的行政を中心とした種々の行政事務を遂行した。任命は王により行はれ、何時でも解任され得た。普通は伯爵がその地位に送り出されたが、より広い地域とか重要地域には候、公爵が送りこまれた。

こういった中世国家にとっては王位継承、婚姻、相続といった問題が重要であった。これらの国事行為によって正当性 (Legitimacy) の問題から領土の移転、削減等の問題が起つたからである。例えばハプスブルグ家のチャールス五世 (Charles V, 1519-1555) は、父方 (Philip, d. 1506) の祖父母が Maximilian I のブルグンティの Mary であり、母方 Joanna of Spain の祖父母がアラゴン王 Ferdinand とカスティールユの女王 Isabella であつた為その法定相続によってブルグンティ (公爵)、カスティールユ、アラゴン、ネープルス、シシリー、サルジニア (夫々の王) ハプ

スブルグの大公位を受け、新世界のスペイン領をも手中にしたのであった。彼は一五一九年六月、エムペラーに選出されるが、その帝国はかくの如くウイーンからペルーに及ぶ世界国家のそれであった。⁽⁴⁾

3. ギルド

国家の経済生活は国家が管理統制していた。地理的世界発見も国王の事業として国王によって遂行された。農業国家であり、経済の統制は比較的容易であった。農業は、毎年同じ工程のくりかえしで、また拡大再生産は無かった。これを実行しようとすれば、領土を拡張する以外無かったのである。その面でも実行は国家に頼る以外無かったのである。勢い国家の力は国家全体を強力におおった。播種と収穫以外農産物の生産は、自然の生成にまつ以外のものではない。この点、農民と国家は同じ次元で農業に対向し得たのであった。近代資本主義に於ては、生産課程は複雑且大規模で、それは拡大再生産につぐ拡大再生産を行い、生産、流通、消費の工程の中に国家の介入する余地は無かった。景気不景気の波に周期的にあらわれる資本主義経済は、根本に於て国家権力の行使からは全く無縁の存在であり得たのである。この面での場合国家は非常にすくない部面に於てのみ経済にかかわることで足りるのである。経済活動から生じる利益の一部を税金の形で国家の立法、司法、行政に消費することで充分国家活動が全う出来るのである。公定歩合、為替操作、補助金、種々の経済活動外的経済規制等が国家が資本主義経済活動の外延として資本主義経済活動の円滑な運営をはかる為に最小限必要な事柄である。国家が経済を運営し、それが資本主義コーポレーションの活動を自ら行う部面―国营、公的企業、専売制―も存在し得たけれど資本主義経済の発展と共にこれらもその発達の程度に応じて強大な民間企業の中に吸収されていってしまう。こうして国家は、経済的生産、流通、消費をスムー

ズに行う為のこれらを外から守る―そして軍事力を捨象し、国家の防衛を自国だけが担当したい場合は尚更―為だけの役割を果す秩序維持国家 (night watch state) として充分にその存在意義を発揮することとなるのである。しかしこれとても企業が、具体的場合としてイザという時国家の警察力の介入を最後迄承認するかどうかという微妙な問題も残るのである。こうして人々は資本主義経済活動に直接介入しない国家や政治の事をついつい忘れてしまふ。彼等の関心は経済活動にあり、景気の維持やその回復に全的に向けられてしまふのである。国家の経済的活動として現代資本主義が世界的規模に広がるにつれ、国際的経済会議が種々開かれる。これには国家の行政機関が参加し、企業側の代表は―種々の企業団体連合が形成されているにも不拘―参加しない。この場合、国家の産業はこの会議で定められた色々の規制を受けることになる。ここに国家の資本主義経済体制に振う強力な支配がみられるが、これらもあくまで経済活動の外枠の問題、経済外的強制の問題であつて資本主義経済活動内部の問題ではなく、かえつて此摩擦を生ずるのが常であり、特にその外枠がその国の産業活動に不利と考ふる結果を生じた場合―現代の広汎多様な経済活動では、一つの影響は一面的に生じるものでなく、不利、有利は経済活動に凸凹の結果を生み出すものではない。―この国家活動は、不利益を生じた産業団体に当然大いに反撥され、またその恨みを買つて国家がそのうらみの対象となることが屢々である。こうなると国民の国家離れ、政治離れが益々この面で助長される。これら国際会議が経済団体代表が一堂に集まつて開かれるということになれば、そこにまた新しい局面が開けてくることになるかも知れない。そういった試みが官民合同大臣会議といった形ではじめて行われたことが一九九四年一〇月に報道されているが、経済人のみの国際会議が開かれれば、それに従つて新しい政治体制、国家体制がつけられるかも知れない。話は飛躍する様であるが、そうなれば、これらに関し新しい局面への模索がはじまる方向へ物事が進む可

能性は否定しきれないであろう。(経済団体、労働団体が既成政党のみにたよることをやめて彼等自らが夫々の代議士を選んでこれを施政壇上に送り既成政党とならんで政治を行う体制の創造も考えられないことはない)。

これら現代資本主義国家と対比すれば中世国家の特色はよく理解出来る。中世国家は農業国家である点はさきにも述べたが、この農業社会から近代資本主義の萌芽が生れてくる。中世社会に於ては、製造はこれを司る工人と彼等を行ねる親方の構成するギルド社会が中心であった。工人ギルドに於ては、徒弟から一人前の工人になる修業が行われる。技術の水準は高く、一人前になるのには種々の試練が課せられた。この一人前の工人をジャーニイマン(journey man)と呼んだ。工人ギルドと同じく商人ギルドがあった。例えば wool trade guild 等である。これが官許の特権をもって売買を行った。ギルドはすべて中世国家の強い規制の下にあった。しかし早くも中世後期になると主としてこの工人ギルド体制がくずれはじめる。厳しい規制の下に置かれていたが、ギルドの徒弟の数は増加の傾向にあったし、ジャーニイマン自身が変革の契機となった。年季奉公を終えたジャーニイマンが、毎年巷に出、その数はふえる一方で、年季奉公があけても親方になる数が限られてくるという現象が起ってきたのである。そしてこうしたジャーニイマンを親方が雇いはじめた製造企業を興すという現象が広がってきた。即ち親方が小資本家と変化してゆくのであった。そしてその上、商人と工人ギルドの交流が同じ線に副って行われはじめたのであった。即ち比較的大規模の織物産業が、まず企業のさきがけとして現われるのがこの期の特長であるが、この取引を行う商人がこの企業主となってゆき、工人ギルドの親方に目をつけて彼等をこの商人が雇い入れて直接自己の企業の製造部を構成してゆくこととなるのであった。こうして商人、親方企業が、そここに生れ出て、資本家が生じ、労働者があらわれて、中世ギルド社会が近代資本主義産業社会に変化してゆく契機が大きく生じるのであった。

近代資本主義社会といえ、中世に於てもそれと同じ様な巨額の資本を集め、これを以て商業、貿易、金融を営んだ名高いメジチ家 (the House of Medici in Florence, 15c—18c)、フッガー家 (the House of Fugger in Augsburg) がある。メジチ家は、フロレンスの事実上の支配者といわれ、その二つの港で種々の貿易に従事して富を築いた(織物、ウール交易ギルド (Arte di calimala & Arte della Lana) の組成員) が、その本領は銀行業にあり、当時、全欧的に盛んとなったそれに従事して大きくなった。当時銀行業は、イタリアの独占的傾向にあり、英仏独の金融業者がイタリア人と共同していた。メジチ家は政治的にフランスと対立し、フランス軍の侵入を受けたりしたが(チャールス八世、一四九四年) フロレンスの人々はメジチ家を支持した。この家系は全欧的勢力となり法王(レオ一〇世、クレメント七世)をも出している。しかし乍らメジチ家の活躍の本体は、経済活動にあり、それは、商業、工業、金融の三部門に及んでいた。支店を八ヶ所もち、三つの織物工場を操業していた。

フッガー家は一五世紀から一六世紀にかけて栄えたが、歴史上最大の金融(金貸し)業者であり、その点の雷名をとどろかしたのは、一五一九年、チャールス五世が、神聖ローマ皇帝に立候補した時、彼に選挙資金を貸し与えた事であった。その額は五万四千フロリン (543,000 Florins) と言われ、一フロリンは今日の二〇ポンドに当るとされるのでその巨額さが知れる。しかしフッガー家は勿論本質的には、商業、工業を主たる活動部門としていた。それは主として織物、スパイス貿易に従事していたが、チロルの銀山、銅山をも手に入れ(一四八七年) カリンシア、チューリンジアには原鉱の加工場を開いていた。これらはみな領主に対する貸金の担保として入手した。借主は、ハプスブルグ家とされたが、チャールス皇帝の縁で、スペインのアルマデンの水銀、ガダルカナルの銀を含むスペインの軍事組織の年収を獲得した。その富は、一五一一年には創業時の千倍にも達し一八二万四千四一一フロリンあると言われ

た。その富は、フッガー家の借り主であるハプスブルグ家のドイツ・プロテスタント、オランダの叛徒、トルコ、フランス等との戦いなどで必要となった資金を貸し出し尚増加した。これが可能であり、メジチ家、フッガー家等が現われたのは、金貸し制度が確立しており、元本、利子（高額）迄もキチンと返済されたからであった。そのもとは、マーカンテリズム、植民地支配、そして戦争であった。王は借りた金でこれらの財政を賄い、その利得で借金と利子を返済した。しかし王政、封建制の下ではこういった運動のくり返して、市民社会の発達はなく、金貸し資本が産業資本に転嫁して拡大再生産、流通、消費を培うことも無く、覇権の推移と新しい産業社会の出現の前にこれら金融制度と中世経済は崩壊してゆく。

4. 市民社会と教育

こうした中世資本主義から近代資本主義が生れ発達して行くのであるが、そのにない手となる英国、フランス、ドイツ、米国、日本は何故近代資本主義を発達させ得たかが、次の問題である。資本主義の先駆者達とまた所謂後発国とのこれら諸国の相異の根本点は何であるかという問題である。その答はまず市民社会の発達である。自由、平等、独立の個人の集団が形成されることがまずこれらの大前提となる。憲法を有し、教育の普及した社会が出現すると共にそこに産業がめばえ発達してくるのである。市民社会の成立を否定し、またこれに疑問を投げかける所論は大なり、小なり反動であると理解してよい。近代資本主義社会が諸々の自由を得て発達する様に市民社会の庶民は種々の自由を得て近代資本主義の発展の為に活動する。こういった市民が形成されることによって、近代資本主義の基盤がつくられるが、それが成就するのは、教育によってである。一定の水準に達した教育を受けられる人々がこれを可能にす

説 論

る。市民社会の人々は能力主義によって社会に参画する。中世社会に於ては、人々は、身分と階級によって社会に参入した。市民社会の人々は受けた教育によって社会に出る。大きな相違である。能力は、教育によって開発されるからである。教育が人々の能力をつちかい、その能力によって人々の価値がきまるのである。これが市民社会であり、その中核的動因は教育である。一定の水準に達した能力を有する一般的多数の市民が農工商の各部門に於て活動し、経済の発展をはかるのである。この場合、ヒーローや天才はこれらの人々の間から生れる。ヒーローや天才が先に出て人々を牽引するのではない。例えば、幾世代にもわたり世界を指導する文人が輩出しても、市民社会が形成されないなければそれらの実績は単なる教養にとどまるか間接的教科の対象となるにすぎない。

5. マックス・ウェーバーと井原西鶴

市民社会の形成が近代資本主義社会の土台であるとして、その経済を牽引するものは何かが次の課題となる。市民社会がこれにつき従うべき準則である。それは大きくわけて節儉と勤勉ということになる。これは大昔から誰でも知っていることであるが、これを資本主義の精神として体系的に説明したのがマックス・ウェーバーの *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, 1904-5.* (プロテスタントの倫理と資本主義の精神) であると考えねばならない。ウェーバーの本書が巾広いまた奥深いキリスト教諸派の智識の分析を行っていることからその土台ののっかって誰でも知っている節約と勤勉という徳目が大いにその価値を高めたということは言えるであろう。彼のとくところは今日常識的とさえなっていて、これを謀々することもないが、彼は一日十シリング稼ぐ人が半日休むと五シリングを捨てる事になり、五シリング捨てた事は、金が金

を生むのであるから結局一〇〇ポンド捨てた事になると言い、同じ理屈で一頭の母豚を殺せば、一千代までの豚の子孫を殺したことになると言つてこの原理を説明している。⁽⁹⁾ところで本書は、日本の明治三七・八年に初版が刊行されたということであるが、日本ではこの思想は早くから単に口伝えに言われていたという事でなく文字となって刊行されていた。即ち井原西鶴の「日本永代藏」がそれである。これは元禄元年、一六八八年に出版されたが、ここでマックス・ウェーバーと同じ節儉勤勉の思想が興味深く小説(浮世草子)化されている。彼は言っている。「見ぬ嶋の鬼の持ちしかくれ笠かくれみのも俄か雨の役にたたねば。手遠きねがい捨て近道にそれぞれの家職を上げむべし。福德は其の身の堅固に有。朝夕油断する事なかれ。こと更世の仁義を本として神仏をまつるべし」(漢字を現代読み風に筆者なりになおした。以下同様)。また次の様に言う。「今此娑婆^{シャバ}につかみどりはなし。我頼むまでもなく。どみんなは汝にそなはる夫は田うちて婦は機織て朝暮其いとなみすべし」と。そして「それ世の中に借銀の利足程おそろしき物はなし」として泉州水間観音の貸銭の話を書き、三銭、五銭、十銭という金を人々が寺から借りて一年たつて倍にしてかえず風習をのべ、ある時、二三、四の男が寺から何と一貫を借りて立去つた。名前も住所も聞かない。件の男は江戸の住人であつたが、これをわけてまた人々に貸し出し、観音の銭という大いに幸せよく評判がたつた。この為人々がこれを借りにむらがる様になり、一年一倍の算用はその利息がつもつて十三年目に元一貫のぜにが何と千九百九拾貳貫にかさんだ。男はこれを馬につけて東海道を通し馬とし、元利を寺に送るかえした、と。節儉勤勉の話と共に利子の話を付け加え、西鶴の経済眼のするどさをみせつけている。「日本永代藏」はその副題が「大福新長者教」とあつて、そのあらわさんとした意図はあまりに明らかであると言わねばならない。⁽¹⁰⁾この時期は江戸時代寛永(二〇年間、徳川家光・治)につぐ幕政安定期で、元禄(一六年間、徳川綱吉・治)、享保(二〇年間、徳川吉宗・治)と

つづく時代であった。農具が改良されて収穫がふえ、商業・金融が発達して大阪二四組問屋、江戸一〇組問屋ができ、貨幣の流通、換算が安定し（金一両を夫々銀五〇匁、四分、一六朱、錢四貫文）米は江戸、大阪に集中する様になり米相場がたつ様になっていった。「日本永代藏は」この様な雰囲気をいち早く体得して世に出て、経済生活を指導した。「プロスタントの倫理と資本主義の精神」刊行に先立つ二一六年であった。西鶴の経済観、その感覚は、庶民のそれらの反映としてあらわれてここに日本人、特に大阪人の経済感覚が如何に世界的にすぐれたものであるかが如実に示されているが、ちなみに言えば、これは一八世紀になると徳川時代盛んに学ばれた儒学が町人文化にわかりやすい様にとり入れられ、考憐仁義礼智信の教えが心学という学問となって普及する。石田梅岩、中澤道二等著名な学者が出る。そして更にこの傾向は、洒落本、黄表紙の類にまでとり入れられて、そしてここではまた節儉、勤勉が強調されるのである。即ち山東京伝の「心学早染草」はこの傾向を代表するものと言われ、大いに町人の間にもてはやされた。⁽¹⁾

ここに日本人の資本主義の精神が如何にするどいかを井原西鶴、山東京伝等をあげて、すこしく検討してみたのだが、洋の東西を問はないこの精神をマックス・ウェーバーの要約の一端として最後ここに示しておく。

(1)「これらの文章（マックス・ウェーバーの先にあげた所論、筆者註）に於て我々に説明しているのは、B・フランクリン（Benjamin Franklin）である。それが資本主義の精神であることは、我々がその精神に当然属すると理解され得るすべてがそれに含まれていると如何程主張する事を欲しないとしても、何人も疑はないであろう。一寸次の一節について考えてみよう。その哲学は Kurrnberger が次の様に要約する。彼等は牛から獣脂をとり、人から金をとる」。このどん欲の哲学の特性は、信用ある正直者の理想であり、就中それ自身が目的と考えられる彼の資本を増

加さすべき個人の義務の観念である様にみえる。真実、ここに語られているものは、単純に世間で人の生き方をきめる手段ではなく、特異な倫理的なものである。そのルールに違反することは、愚鈍として取扱われるのではなく、義務の忘却として取扱われる。それが、物事の本質である。それは単なる職業的狡猾さではない——この種類の物事は、充分一般的である——それは ethos 道徳的理性的特質である。これが我々の関心と呼ぶ特質である」。

(2) 「フランクリンの全道徳的態度は、功利主義で色どられている。正直は有用である。それは信用をつちかう。時間厳守、勤勉、節儉がそうであり、そしてそれがこれらが徳行である理由である」。

(3) 「人は、生涯の目的として利得により金を蓄えることに支配されている。経済的利得は、最早人の物質的必要性を満足さす為の手段として人に従属させられていない。我々が自然的関係と呼ぶもののこの転換は、ナイーブな見地から大へん不合理な様にみえるけれど、明らかに資本主義的な影響下にならぬ総ての人々にとってそれが無縁のものであるだけそれだけ明確に資本主義にとつては指導的原理である。同時にそれは、ある宗教的理念と緊密に結びついた一つの型の感情を表明する。かくして我々が、何故「金が人々から作り出されるべきか」を尋ねたなら、ベンジャミン・フランクリンは、無色の自然神教信奉者であるけれど、カルビニストの父からくりかえし教えこまれたことをバイブルからの引用を以てその自伝の中で答えとしてのべている。「汝は、その職業に忠実な勤勉な人を見るや。彼は王達の前に導かれるであろう」。近代経済秩序の中の貨幣の獲得は、それが合法的になされる限り、天命としての徳行と熟達の結果と発現である。——そしてこの徳行と熟達は、…フランクリンの倫理の現実的アルファとオメガである」。

一、イスラム世界と十字軍

セルジューク・トルコ

シャルマーニュ (Charlemagne) 大帝がその帝国を建設したのは紀元八一二年と称されるが、それは彼の神聖ローマ帝国がビザンチン (東ローマ、Byzantine) 帝国に承認された年を意味した。フランク王国が神聖ローマ帝国の国号をとったのは八〇〇年のことであったが、当時、その国は、西は大西洋、南は地中海 (ローマを含む)、北はドイツ人 (Danes) の国を境界とし、新版図として西はピレネー山脈南側の辺境地帯、東はエルベ河西域の諸地方、サクソニア、カリンシア等を含んで、尚その勢力範囲をオーデル河沿いに広げ、モラビア、スロバキアをその権力下に置いていた。今日の国家区分から見ると神聖ローマ帝国は、その版図に大略、フランス、ドイツ、オーストリア、そしてチェッコスロバキアの大部分、イタリアの大部分、スペインの一部を含んでいたことになる。

八一四年に、シャルマーニュ大帝が没し、帝権が息子のルイ・敬虔王、814-840 (Louis the Pious) にわたると神聖ローマ帝国に衰退がみえはじめ、所謂フランス、ドイツにその大部分が分裂することを含んで、昔日の面影を追々失う。そうすると所謂北方民族の蠢動が繁くなる。これがビザンチン帝国の衰退と時を同じくしてトルコの西歐進出、その拡大をうながすこととなるのであった。

その先ぶれの争乱は、ハンガリー人、ブルガリア人からきた。彼等は東西欧州に進出し、前者はスイスの聖ゴールの修道院を破壊し、ブレーメンにも進出した。そして彼等は独仏両国をかすめてアルプスを越え、九三八年、三九年には北イタリアに現れた。ブルガリア人は、トルコ系と称され、ロシアの東からきて勢力を拡大しつつあった。しか

し乍らハンガリー人、ブルガリア人共に一〇〇〇年迄にキリスト教化される。彼等の背後から来たのがトルコ人であった。この時トルコ人はセルジュク族 (Seljuk) に属し、早くにギリシャ人の手からアルメニアを奪っていたが、バグダッドのカリフ (Caliph) に影響し、その管区を事実上支配していた。彼等は回教派としては正統スンニ派 (orthodox Sunnites) であり異端と称するシーア派 (Shiite heretics) にはペルシア、イラク、パレスタイン、シリア、エジプト等が属していた。セルジュク・トルコは現トルコのアナトリアに進出し、コンスタンチノーブルを奪取せんとした。彼等に対抗するビザンチンの守りシリシアの地は、アルメニアが奪われたことでその北東をセルジュクに開放したのであった。そしてセルジュク族は、アルプ・アルスラン (Alp Arslan) の下に大軍を集め、目的に向って進撃を開始し、一〇七一年、遂にマンチカートでビザンチン軍を打破したのであった。小アジアの喪失につながるこの敗北は、ビザンチン帝国と人々にはかり知れない悪影響を与へた。そしてセルジュク・トルコはイスラムの力を回復し、聖地エルサレムをエジプトのカリフから開放すると共にコニアを奪ってそこに進出した。その先端はコンスタンチノーブルの城門をまでおびやかした。

ウルバン二世

こうして西方からはノルマン人の侵害を受けていたビザンチン帝国は新たにセルジュク・トルコの進攻にあい、社稷は累卵の危きに立った。時の皇帝アレキシウス (Alexius Comnenus) は、ローマ法王ウルバン二世 (Urban II) に、ビザンチン帝国救援の緊急の要請を発した。これは既に先王グレゴリー七世 (Gregory VII) に対して行われていた。しかしこの時迄ビザンチン皇帝と法王との間には、幾多の政治上、宗教上の問題がわだかまっていた。そして

説
問題の中心は、当時、聖職者任命の最終、最高責任者は、誰か、法王か、皇帝か、という点にあった (investitures)。ビザンチン帝国からの救援要請は、法王に梃の先端を持たした様なものであった。しかしウルバン二世は、直接これに答えず、この機会をとらえ、一大決心のもとに立った。それは、かくの如く蛮勇をふるい、ビザンチン帝国を亡ぼそうとする異教との対決、聖地の回復であった。時にキリスト教会の腐敗は極に達し、性的紊乱、蓄財、贈収賄は目をおおうばかりであったという。法王は、この墮落を匡正する責にも任じていた (Cluniac Benedictine Reform)。

異教の撲滅とキリスト教会の改革と発展、コンスタンチン王のたてた聖なる墓所 (Holy Sepulchre) の奪回は、この大号令を得たキリスト者をふるいたさせた。彼等はこの一大目標の下に新しい力を發揮し、新しい統一に結集した。時に一〇九五年、これが十字軍の興りであった。⁽¹⁷⁾

イスラム圏

十字軍については、言うべきことは頗る多い。また多岐にわたっている。しかしここでは、その説明は目的ではない。ここでは、イスラムの拡大とその西欧への侵勢、トルコのそれについてのべ、キリスト教世界とイスラムの抗争の中から、遂にアジアへの道を封じられた西欧が、その道を海上に求め、幾多のシー・ルートの発見と開設に努力する姿を描く、この所謂地理的世界発見が、西欧勢力の世界植民地化と東漸をもたらし、世界の西欧化を結果し、確立する。それは、今日に及んでいる。紙と火薬の発明は、中国で行われた。しかしそれはその後アジアでその成果をあげげなかった。その果実は西欧で收穫される。それは何故か、マックス・ウェーバーによれば、それはすべての体系化、組織化の問題 (科学) であるという。これを成就したものが、その成果を享受し、そうでないものは、それから

排除される、と。⁽¹⁸⁾

当時イスラム世界とキリスト教世界の対立抗争は以下の如くであった。七世紀から八世紀にかけてキリスト教世界は、西ゴート、フランキッシュ、ロンバルド各王国と東ローマ帝国チエルソン地方ゴート、それにドンゴラ王国とエチオピアを含んでいた。これに対してイスラム世界は、ササン朝帝国、アラビア半島、それにアフリカ北岸に副った狭い地域に広がっていたが、西紀七〇〇年から九〇〇年に至ると、キリスト教世界にさしたる変化発展がみられなかったのに反し、イスラム世界の変化拡大は目ざましく、欧州西南方では、それは、西ゴート王国即ち現スペインを従え、ピレネー山脈を越えてフランキッシュ王国の西南部に進出し、アフリカ北岸部を現モロッコ、アルゼリア、リビア、エジプトに迄進出した。東ではその教勢はアラビア半島を越えて北はボハラ、サマルカンド、タシュケントに及び、南は、ヒンダス地方、マクランにまで達した。西欧キリスト教国にとっては、実に恐るべき浸勢であった。十字軍発進の前夜に至ると事態はキリスト教圈にとり更に深刻となった。即ちこの傾向は益々強化され、キリスト教圈は、漸くその教義をキエフ、チェルニゴフ、ノブゴロドに伸張することが出来たが、一方、イスラム圈の発展はとどまるところを知らずその拡大は実に前世紀の二倍にも達しようとしたからであった。即ちそれは、現トルコ本土をキリスト圈からイスラム圈に移すという荒業をやつてのけ、更に教勢はインドにも及び、カシミールからラホールを席捲して、ガンジス河、ナルバーダ河に達しその両河川に囲まれた地域に教義を定着させたのであった。

この情勢では、キリスト教圈のみならず、誰にとってもイスラムのこの拡大と暴れ馬の如き勢を何とか喰いとめねばならないと考え、焦るのは当然であった。これが十字軍発進の一大背景であった。このキリスト教圈とイスラム圈の併存は、爾来八百年経た今日でも変化はみられず、言うまでも無く世界の現勢である。今日、イスラム圈は、ア

リカにはモロッコ、モリタニア、セネガル、ガムビア、ギニア、チュニジア、アルゼリア、マリ、リビア、ナイジ
アー、チャド、エジプト、スーダン、ソマリアがあり、中近東では、トルコ、シリア、レバノン、イラク、ヨルダン、
クウェート、カタール、サウジ・アラビア、アラブ連邦、オーマン、イエメン、アゼルバイジャン、イランを含み、
旧ソ連圏には、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルコメニスタン、アフガニスタン、
それにカシミール、パキスタン、バングラデッシュがあり、尚東南アジアにインドネシア、マレーシアがある。⁽¹⁹⁾この
大勢といまだ熱いコーラン信仰に結ばれた宗界が一大勢力となって西欧世界と併存している図は、決して軽視され
はならない。仏教国である日本は、この面については、世界の二大宗派にとって異端であり、その意味の兄弟を持た
ず、世界政治に活躍するに当っては、この現実を心得た外交の展開が必要不可欠である。

十字軍

ウルバン二世の大号令は、キリスト教世界になりひびいたが、この時マスメディアの役割を果たしたものがいた。
それは、ヘブライ予言者の流れをくむフランス人のペーター・ハーミット (Peter the Hermit) で、彼はハダシで粗
悪な衣服をまとい、ロバにまたがって大きな十字架をにない、エルサレムへのキリスト者巡礼が如何にセルジュック
トルコに迫害されているか、傷つけられ、狂暴に扱われているか、そして遂に一〇七三年キリストの聖墓は彼等に破
壊されたと人々に訴えた。それが真実であるかどうかはこの時関係がなかった。彼はフランス、ドイツをへめぐって、
辻々にたち教会でまた市場で信者に熱弁をふるった。⁽²⁰⁾

時にすでにしてキリスト教のムスリムに対する反撃がはじまっていた。一一世紀はじめ、バイキングとマジャーール

がキリスト教化され、キリスト教徒の反撃は一〇八五年にスペインのトレド、チュニジアのマーディア基地を奪回し、一〇八七年には、イタリア各市からピサンとその同盟者達が、一〇九一年にはシシリーから最後のムスリムが追い出された。この情勢下十字軍への情熱は高まり、北南フランス、南イタリアに人々は集合し一〇九五年、エルサレムへ向って彼等は進発した。一〇九六―九七年彼等はコンスタンチノーブルに達し、ここで諸隊は合流して南下し一〇九八年アンテイオーク、翌年エルサレムを占領した⁽²⁾。しかし遠征隊はここで重大な挫折に会い、アンチオークでは、守将ベヘムンド (Bohemund of Otranto) が敵軍の捕虜となり、次々送られて来る遠征諸軍や艦隊は打破られ、また立往生となった。こうして十字軍は、進発早くも一進一退となり、エルサレムを彼我相互に奪い合った。それは前後九回の遠征を数えるが、一一八九年に進発した英仏独連合軍は、独王が道にあやまって溺死する等の悲劇が起り、英王リチャード (Richard I of England) は一日エルサレムを奪取するが連合軍内に孤立してサラヂンと和睦し、英国に帰る。また一二二二年には数千名の少年隊が勇躍聖地に赴かんと独仏両国を出発したが、イタリア海岸で、多くの餓え死にし、残存部隊が船で聖地に向ったがアレキサンドリアにみちびかれてしまい、そこで奴隷に売られてしまった。こういう悲劇もあった。

十字軍の終焉

フランスのルイ九世 (Louis IX of France, St. Louis) は、一二四九年エジプトを目ざしたが、そこで毘にはまり彼の軍隊の大部分と共に捕虜となった。その結末は、身代金として八〇万個の金塊の支払いであった。仇を報じんとした王は、勇を振り再度の十字軍に挑んだがその途に死んでしまった。英国のプリンス・エドワード (afterwards

説 Edward I) もその数ヶ月後十字軍を興したが何の成果も上げ得なかった。ローヤル・ファミリーの最後に登場するのは、サイプラスのペーター (Peter of Cyprus) で、彼は、一三六五年から六七年にかけてエジプト、シリアに聖戦を展開したが決定的勝利を収め得ず、軍中に暗殺されてしまった。

この間勿論法王は、聖戦完遂にあらゆる努力を傾注したが、十字軍の全歴史は、みる如く失敗と悲惨の形容詞をちりばめられるものと言って過言ではなかった。一四五三年、コンスタンチノーブルが再びそして永遠にモハメッド二世 (Mohammed II) の手によってイスラムに回復せられた時も、事情は最早変らなかつた (ビザンチン帝国の終焉)。パイウス二世 (Pius II) のキリスト者に対する聖都奪回の必死の訴えも今やキリスト教圏に何の感興も起さなかつたのである。そして以後は、ロードス島、マルタ島の騎士団によるトルコ体制への抵抗が、散発的にほそぼそと続いただけとなつてしまつたのであつた。

二、大陸の争闘と海への転回

オットマン・トルコ

セルジュック・トルコ族は、十字軍のコンスタンチノーブル、エルサレムへの進撃の歴史の中で翻弄されその姿を消してゆく (同族間の内紛内戦が主原因とされる)。このセルジュック・トルコに代るものは、しかしビザンチン帝国内の諸民族ではなかつた。ギリシア人、ハンガリー人、ブルガリア人等はビザンチン帝国の中で活躍し、王朝を形成したのもあつたが、帝国をおびやかしたセルジュック・トルコに代るものとして最後、ビザンチン帝国の版図を継承するものは、同じトルコ族の中のオットマン・トルコ族であつた。

オットマン・トルコ族は、中央アジアに興ったとされるが、ジンギズカーン (Jenghis Khan) の蒙古帝国に圧迫されて西南方へ移動してきたという。その途次の政治的、社会経済的活躍については、定かにされない。そして最後小アジアに辿りつき、近隣諸族、特にセルジュック・トルコ族の中に血縁関係と親近性を見出した。オットマン・トルコは、諸トルコ侯国の中で追々頭角を現わし、セルジュック帝国の下に重要豪族となっていたが、十字軍が開始されると共にセルジュック・トルコ帝国、ビザンチン帝国の衰退に乗じて勢力を広げた。一一五七年にセルジュック帝国が亡びるとオスマンリイ侯国 (Osmanli (Ottoman)) を建設した。この小国は、ビザンチン帝国々境附近に存在していたとされる。一二九〇年頃から出現し、その建国の父はオスマン (Osman) という名であった。急速に勢力をのばし、遊牧民やアナトリア中央の都市住民を受け入れ、勢力を拡大した。国家は膨張主義に転じ、一二〇一年にはビザンチン帝国のギリシア軍と戦ってこれを破り、ブルサをとり、一二二九年にはビザンチン帝国軍をまで打破った。オルハン一世 (Orkhan I 1326-1362) の時、トルコ貨幣を鑄造し、カレッジを開いた。王はガジ (Ghazis, 信仰の戦士) のサルタンの称号をとった。欧州に第一歩を印したのは一三四五年であったが、一三五二年には、ガリポリを奪ってそこに拠点を築いた。ムラッド一世 (Murad I, 1362-1389) はトルコをアナトリア、バルカンにまたがる一大勢力とし、ビザンチン皇帝も以後実質上トルコの威令に聞かねばならなくなった。アドリアノーブルを首都と定めた。ついでセルビア、ボスニア、ブルガリア等との角逐が起り、一三八九年のコンボの戦いでトルコ軍は、遂にこれら連合軍を打破ったが、ムラッド一世はセルビア人に暗殺された。バヤジド一世 (Bayazid I, 1389-1402) がたつてブルガリアを制圧しその王を処刑した。北方に興ったチムールと対抗する為、エジプト、ゴールデン・ホルドと結んだ。一三九五年にはバヤジド王は、コンスタンチノーブルを囲んだ。これに挑んだハンガリー、英仏独、ロー

マ、アビニヨンの法王軍はニコポリス近傍で破れたが、一三九九年トルコ王族の裏切りによってチムール軍が襲来し、バヤジッドは囚はれて後に自殺した（一四〇二・七・二八）。後継の王子達の間で王位継承争いが起り、一四一三年に至ってその一人がメヘメット一世 (Mehmed I, 1413-21) となった。内政的には王族間の争いや、アナトリアの諸侯の再統一に力を致したが、セルビア人、ビザンチン帝等と友好を打たてた。外政的には、ベニスと戦い、ワラキアに侵寇した。一四二二年ムラッド二世 (Murad II, 1421-51) がたつたが、直後、王族の年長者ムスタファ (Mustafa) とサルタン位をめぐる争い、最後彼を殺した。ギリシア王と一四二四年平和を結んだ。ついでサロニカ、全セルビアを奪い、ハンガリー軍と対峙した。これが十字軍の再興となり、アドリアノーブルの休戦を導いて王は位を長子メヘメット (一二才) に譲った。しかし休戦は破られハンガリー軍、ベネチア軍の進攻となった為、王は再び出て、軍の先頭にたち、ベネチア艦隊をボスフォラスに破った。為にハンガリー軍は多数の捕虜を残して退いた。ムラッド二世 (第二期支配一四四六―五一) は尚、コンボの戦いでトランシルバニア軍をも打破った。こうして征服王モハメッド二世 (Mohammed II, 1451-81) の登場となる。彼は軍、行政を完全支配し、ルーメリアとアナトリアを不拔の地域とし、トルコ諸侯を再統一して帝国の基礎を固めた。宮廷にモスレム、ギリシア、イタリアの学者を多数集めた。そしてボスフォラスに欧州進攻の城塞を築いた。当然これがビザンチン最後の皇帝ギリシアのコンスタンチン王との直接対決となり、コンスタンチノーブルをめぐる死闘が展開された。コンスタンチノーブルは、幾重にも囲まれた城塞によって防護され難攻不落を誇り精強な艦隊を有して、これが、ベネチアとゼノアの支援を直接受けていた。ビザンツ側は大きな鎖をばって敵艦隊をゴールデン岬からしめ出してしまった。トルコ軍は大砲を用い、連日巨弾を城壁に打ちこんだ。破壊箇所はすぐさま修理された。トルコ軍は、最後七〇そうの小舟をボスフォラスの陸路

から引ずってゴールデン岬に出、一四五三年五月二九日、総攻撃に移った。結果した乱軍の中でコンスタンチン帝は討死にし、敗軍は、ベネチアとゼノアの舟に拾はれて逃散した。かくして千年の都を誇ったコンスタンチノープルは陥落し、ここにビザンチン帝国は滅亡した。キリスト教は破壊され、イスラムが広められた。⁽²³⁾

十字軍の動機と目的 (1)

キリスト教渾身の一大壮挙十字軍は、失敗した。それはエルサレム王国を建設し約二百年に及ぶ支配をパレスティン地方に張ったが、すべてはアラブとオットマン・トルコの為に無にかえされてしまった。キリスト教が統一を保っていた最後の一大事業であった十字軍は、逆に、これによってキリスト教がその統一を維持しようとした試みであったのかもしれない。キリスト教は当時腐敗の極に達していた。それは人の心に王国を打ちたてる使命を忘れ、富と権力で人々を支配していた。教会は報酬と徴税で富み、僧侶はマネー・ゲームに走り、肉欲にふけていた。僧侶は特権で国の税金をまぬがれていた。法王は教会法をまげ、個々のケースで神の判断を下せるとし、いとこ同士の婚姻、二人妻、誓約からの解放等を許容した。十字軍と共に異端に対する誅求は厳酷となり、彼等は無慈悲に焼かれ、水に沈められた。一三七八年には「大分裂」(Great Schism) が起って法王が二人たち (Urban VI, et Clement VIII) 法王派と反法王派にわかれ、皇帝、英国王、ハンガリー、ポーランドと仏王、スコットランド王、スペイン、ポルトガル、ドイツ諸侯とが対立した(これは一四一七年にMartin Vがたって修復される)。教会の腐敗の最たるものと目されるのは、ルッター (Martin Lutter) の攻撃の目標となった「免罪符」(Indulgences) の発売であった。これは、金銭の支払いによって浄罪界の魂の苦悩が軽減されるとするものであった。ウルバン二世は、この教界腐敗の矯正運動

説を展開しており、これが、所期の成果を一朝にあげ得ない現状から、聖墓と巡礼回復に向ってキリスト教界の一大結集と同心をはかろうとして異端への攻撃を命令した面があったとされ、このことは一概に否定し得ない。

論

十字軍の動機と目的 (2)

十字軍に人々が結集したのは、勿論キリスト教的情熱のしからしむるところであったが、当時人々の知識の発達とその成熟度から中世への訣別と科学の世界的規模での発達への志向は強烈なものがあり、それは東方世界への門を開いて世界を一つにしようという願望となった。十字軍当時、事実、種々の発明、発見、学問は東方からもたらされ、それらはコペルニクス (Copernicus 1473-1543)、ガリレイ (Galileo Galilei, 1564-1642)、ケプラー (Johannes Kepler, 1571-1630) 等の地動説を根幹とする近代天文学発展の土台を形成したし、医学、数学、化学への貢献ともなつた。これらに關し、当時西欧から東方に輸出、影響するものは無かつたという。

結局はイスラムに破れ去つたキリスト教軍事戦略、戦術も皮肉な事にアラブ世界から強い影響を蒙つていた。石造煉瓦造りがビザンチンとアラブの影響下に西欧にあらわれ、これが石造要塞の建築となり、又教会も煉瓦造りとなつた。彼等は攻城野戦の戦略、戦術もアラブから教えられ、これらにより鉾山の採掘、対壕の造成、攻城の諸機構、器具がキリスト教軍に一般化した。

十字軍の動機と目的 (3)

十字軍を興した事により、東方世界から種々の学問的實際的な強い刺激と影響を受けた西欧世界であったが、二元来

東西両世界の通交、交易は古代から強い願望と実践を経てきており、紀元前一二世紀頃からフェニキア人 (Phoenicians)、アラム人 (Aramaean) 等の東西両世界をつなぐ通交、交易の実行は盛んであった。東方世界と西歐をつなぐかけ橋は、地中海とメソポタミア、西アジアを直接つなぐシリア、パレスタインであり、そこに人々は集まり、物資が集散した。キリスト教とイスラムが同じ様にこの地に発生した事は、故なしとしないであろう。そして東西両大陸に於ける国家的発展と交易、市場経済、通貨制度の発達は新らしいそして大きな規模に於けるそれらの盛行を必然的なものとした。このときビシニア、カルパドシア、エーシア、シリシア (以上現トルコ)、シリア、パレスタイン、アラビア、エジプト、メソポタミア、アルメニア、アッシリアを手中に収めることは、これらの発展に対して大きな効果を發揮し一大利益となることは言うまでもなかった。その地が、セルジュック・トルコの台頭をふくむイスラム教徒の繁栄とビザンチン帝国の衰退によってアラブ人の手におちようとしていた。これを回復する為に起されたのが十字軍であった。人はパンのみによって生きるものにあらずという経済的利潤行動動機の否定がたて前上的一般原理であった当時精神世界の現実が、この運動をいやしい利得主義のそれからきりはなした。キリストの聖なる墓と巡礼の実行を回復するという神々しい目的意識のみが人々をこの失地回復運動に結集させ、かりたてたのであった。それは前述のペーター・ザ・ハーミットの活躍が如実に証明してみせている。

東西世界三つのルート

しかもこのことは、将来の見透しというだけで無く、これに関し、現実の利益の喪失という事態が引起されていた。それは、即ち現に古代から存在して平和時、隊商が盛んに往来していた両大陸間を結ぶ三つのルートがその出発点に

於てキリスト者の介入を許さなくなったという情況がそれであった。この三つのルートとは(1)草原の道、(2)シルクロードそして(3)海の道のそれらであった。(1)は、クリミア半島沿いから出発し、キルギス草原からアルタイ山脈の端を抜け、モンゴル高原を通過して北京に達する北の道、(2)は、シリアのアンチオクからユーフラテス河に沿って下り、バグダッドから東して、トルキスタンから敦煌に出、長安、北京に到達するルート(絹の道)、(3)はエジプトから紅海に出るものとバビロニアからペルシア湾に出るものとが、夫々アラビア海を横切って印度を廻航し、リングスカ、赤土等とよばれた現在のマレー半島を廻航して東南アジアから中国にいたるものであった。しかし情勢下キリスト者は、最早自発的にこれらのルートを利用して東方をめざすことは出来なくなる。シリア、パレスティンをとざされた西欧世界は、最早イニシアチブをもって東に進むことは出来なくなってしまったのであった。膨張する西欧世界にとってこれは耐えられる事態では無い。しかも言はば、この三つのルートだけでは、近代に向う東西両世界にとっては、東西通交にとって既にして不足であったのにおいておやである。それが西欧世界にとって不足どころか、無くなってしまうのであるから事態は深刻であった。

三、大洋からアフリカ、アジア、アメリカへ

ヘンリー航海王子

西欧世界とイスラム世界間の、十字軍に代表される東西決戦は、十字軍の完敗に終わった。クルスの旗は風に破れ、ベツレヘムの聖地は敵にふみ荒された。東をたたれた西欧世界は、しかし近代に向って奔騰し、エネルギーは海に向ってあふれ出す。それが地理的世界発見である。ここから宗教改革の血風が全歐に吹きすさび、植民地が開発され、植

民帝国が建設される。資本主義の本源的蓄積がはじまり、マーカンテリズムは、産業革命を導き、国家は近代国家となり、統一と発展へ飛躍する。

コペルニクスとガリレイの現われる前、天動説に支配された地球は平面であった。海がたたえられ、山嶽が平面上に屹立していた。大河が地球を流れ、その端は地の果から爆竹となってその底へ流れ落ちていた。アフリカは、暗黒の大陸であり、炎をたてて白煙の中に燃えていた。こういったイメージが尚人々の心にわだかまっていた。十字軍の敗辱が漸く明らかとなる頃、ポルトガルの一王子がアフリカを廻航する企てに挑戦していた。ヘンリー航海王子 (Henry the Navigator, 1394-1460) として世界史上名高いポルトガルのジョン一世の息 Enrique at Oporto である。彼の海への挑戦は、年代的に決して十字軍と無関係ではない。彼はまたセウタのヒスバニック・ムーア帝国との戦争に再度従軍しており、こうした背景が彼を海へかりたてたのであった。王子の探検は、カナリー群島からはじまったが、ポチャドール岬を廻る事に成功する迄、何と一五回の失敗が繰り返されたという。これが成就したのは、一四三四年であった。王子は探検の手をゆるめず、その後も引続いてアフリカ西岸を南下することが追求され、ペルダ・ダ・ガレ (一四三六)、ケープ・ブランコ (一四四二) がのりこえられた。しかし王子の生前到達したのは、最後デエバ河からシエラ・レオーネ迄であった。これは一四六〇年であり、この年王子はみまかった。その間ビザンチン帝国は亡び、中近東は西欧にその門戸をとざしたが、それを切り開く新しい東方へのルートが新航路としてヘンリー航海王子の手によって開かれはじめたのであった。

航海王子ヘンリーの成しとげた事業は、歴史に冠たるものであり、それが、世界的開発と発展に及ぼした影響ははかり知れないものがあつた。しかしこの為世界は、植民地帝国時代に入り、この時、自然と平和の中でおだやかに生活していた幾多の人々が苦悩の中に落し入れられる事になる。これはどういう事であるか。これらの実行は、必要悪として発展と文明の名に於て許容せられるのであろうか。はたまたこの為の犠牲となって死と苦悩に見舞われた人々の恨みは、同情を以て幾世代にもわたり語りつがれるべきものであろうか。

この時期ヘンリー王子の衣鉢をつぐ人々は続々とあらわれた。これらはバスコ・ダ・ガマ、ディオゴ・カム(Diogo Cam)、ディアス、コロンブス、アメリゴ、カブラル、マゼラン等々多数の人々である。彼等の名前は世界の史上、人々によく知られている。これらの探検家、航海家をたすけて彼等の事業を遂行させたのは、ポルトガル王ジョン二世(Joao II, ruled 1481-1495)、同マヌエル一世(Manoel I, ruled 1495-1521)、スペイン女王イザベラ(Isabella, ruled 1474-1504)等であつた。ジョン二世は曾祖父ジョン二世と大伯父ヘンリー王子の志をついで世界発見の事業に積極的であつた。大伯父ヘンリー王子は、シオラ・レオーネまで到達したに過ぎなかったが、当時アフリカの南端を廻ることが大命題であつた。トスカネリ地理書の普及により、また東方から伝えられた羅針盤の改良発達によりこれが可能となつていった。ジョン二世は、ディオゴ・カムに命じてアフリカ西岸の探検を実行させた。カムは、この時欧州人としてはじめてロアング湾にいたり、(一四八二・八・四)また数日後コンゴ河の河口を発見した。次いでアングラ河岸を探検し、その後一四八四年四月頃リスボンに帰つた。王は彼の功に年金を以て報い、彼の上衣の袖に二本の柱線をつけることを許した。二本の柱とは彼が、コンゴ河口とアングラのサンタ・マリア湾に打

ちたてたものであった。アンゴラが後ポルトガルの植民地となったもとは、カムの努力によった。

カムはアンゴラ迄到達した。希望峰へは、あと一步であった。その到達は、ディアス (Bartolomeu Dias de Novais) によってなすとげられる。彼は早くにギニア海岸を探検したと想像されている。一四八七年に王命によってリスボンを出発、東方のキリスト教国王幻のプレスター・ジョン (Prester John) とインドへのルートを発見する事業に従事した。彼は種々航海の困難にあい乍ら一四八八年二月以降アフリカ南端に到達、インドへの航路をきわめ得たと考えたが、乗組員の反抗にあつて廻航を果さずにリスボンに帰った。彼は岬を「嵐の岬」と名付けたと言われる。同じ一四八七年にポルトガルの一人の探検家が東方に旅立った。彼はコビルハオ (Covilhao, Pedro de, 1450?-1527?) と呼ばれた人物で、ディアス同様プレスター・ジョンの王国とシナモン (肉桂、セイロンに多産、香料) 発見の為にジョン二世に送り出された人物であった。彼はディアスと違い、バルセロナから地中海を通り、カイロに到り、そこでムーア人の隊商に加えてもらつて陸路を東に旅した。彼は最後、カリカットに到達している。しかし帰路再び王の命にあい、アビシニアに入国した。そこでアビシニア王の好遇を受け、土地、位階を与えられ、アビシニア婦人と結婚した。彼は王に出国を禁止され三〇年間を同国で暮らしたという。千夜一夜の様な話である。

バスコ・ダ・ガマ、コロンブス

右の二名と尚今一名、マゼランについてはあまりにも有名であり、多くを語る必要は無いであろう。ここでの目的は、東方への航路の発見と東方貿易、スパイスと金の取引の確立を目ざす活動を叙述すれば足りるのである。ガマ (Gama, Vasco Da) はポルトガルの人、ジョン二世によってディアスの果たさなかつた事業を完遂する為、東方へ

派遣された。彼は、三雙の船舶と一雙の貨物船をひきいてこの世界史に一大エポックを画する事業に船出した。時に一四九七年七月八日。希望峰に到達したのは一月一六日、しかし風にはばまれ、ここを廻航出来たのは、同二二日であった。こうして懸案のアフリカ廻航は遂に成就された。彼はモザンビークから印度へいたり一四九八年五月二〇日、カリカットにつく。ここで通商条約の締結をはかりポルトガル商業の繁栄をはかるが、モスLEM商人の妨害にあつて条約締結のことは成らなかつた。しかしポルトガル貿易の基礎をきづく。彼のあとはカブラルがついだ。ガマは、困難の末、一四九九年リスボンに帰る。しかし彼のインドに残したポルトガル人はヒンズー教徒とモスLEM貿易商人の為に殺戮され、カブラルのカリカットにたてた工場も破壊されるので、ガマはマニユエル一世 (Manuel I, 1495-1521, ジョン二世の後継、イトコ) に今一度事業に呼び戻され、一五〇二年この為に出発し、再びインドにいたる。この時は、対モスLEM報復として彼はカリカットを砲撃し、進寇してきたモスLEM艦隊を撃破している。漸く植民地帝国の建設がはじまろうとしていたのであった。ガマはこの勢いでコーチン (印度) に進出し、そこで待望の通商条約の締結に成功した。彼は一五〇三年九月、これらの成果をもってリスボンに凱旋する。彼の死は一五二四年一月二四日、尚その後の数々の活動の後、コーチンに於てであった。ガマは、ポルトガルの英雄であり、ディアスと様かわり、王から年金、領地を受け、「印度海洋提督」の称号を授けられ、後遂にビデグエリアの伯爵にのぼせられている (一五一九)。彼と第一回航海の行を共にした従者は、その航海の帰途アラビア海で壞血病の為多数が死んだ。この為ガマは四雙の船を運航出来なくなりその一雙を焼却してしまつたという。一将功なつて万骨枯るの一つの象徴であつた。

コロンブス (Columbus, Christopher, スペイン名 Cristóbal Colón, 1451-1506) 彼はゼノアに父と共に住んでい

たと言われるが、イタリア人ではなく、スペイン系のチュウリイだとされている。出生の詳細も明確ではなく種々の説がある。彼は一四才で航海をはじめたと言っている。一四七二年―七三年、彼はフランスのアンジュー家最後の支配者ルネ (Rene d'Anjou) に仕えて聖ビンセント岬の戦いにも参加したが、この時の彼はイスラム系海賊の一員であったという。

彼が誤ってアメリカへ航海するのはイザヤ書一章一〇―一二の天啓によった。その言葉が彼の航海と発見を予言していたというのであった。彼はインド諸国への航海を計画し、それをスペイン王フェルジナンドとイザベラに手紙で書き送った。しかし事は成就せず、リスボンに赴いた。途中難船し、彼が打上げられたところはヘンリー王子の航海専門学校であった。コロンブスは天啓を強く信じた。彼の地球誤認は、宇宙天文家トスカネリ (Paolo Toscanelli) と予言家エストラス (Esdras) の説を自分流に強信したことからきた。地球は丸く、西進すれば Cathay (シナ) にゆける。しかしスペイン (地球の西端) からインド (東端) への陸地は遠い。何故なら地球は六部分に分けられ、東西両端の間隔は陸地が五部分、海が一部分であるからである。一部分の海へ出なければならぬ。この誤った説がコロンブスをアメリカ大陸 (西インド諸島) へ海から導く事となった。コロンブスはこれに従い前にふれた如く、計画の実行をポルトガル王に要請するが拒絶され、スペインに赴く。フェルジナンド王とイザベラは計画を研究するが、コロンブスの要求する名誉 (大提督、大守等) と経費があまりにも高級且莫大なので二度までこれを拒絶し、彼を放逐する。その間八年。しかし最後、計画はコロンブスの望む線で、両王に採用されることとなった。その莫大な費用は、イザベラの宝石を売ってつくられたという噂がたった。ポルトガルの航海探検はげしさを加えていた。コロンブスは、三隻の大帆船をひきいて一四九二年八月三日、彼のいう西に向ってバロ港から船出した。未知と不安

説

と暴風に悩まされ、乗組員の叛乱気構えの中で彼は、同年一〇月二日、バハマ諸島の一島に到着した。(サン・サルバドル島と命名) コロンブスはシパンゴ(日本)にきたと思い、キューバをそれと誤認した。その中心部に金が出る。彼はクルスと共に交易に心をとられ、金と産物と奴隷の入手に眼をひからせた。七名の現地人をその目的でとらえ、島民は彼等は七名を食べる為にスペインからきたと信じた。ついでハイチにゆくが、暴風雨の為に難船、そこに積荷と乗組員三八名を残してコロンブスは一旦スペインに帰った。この帰途は暴風雨に悩まされ、彼は死を覚悟して彼の航海ストリーを樽に入れて流した。一四九三年三月彼は今度は風の助けによって漸くポルトガルに到着。王には大歓迎されたが廷臣に暗殺を計画された。スペインに帰りついたのは三月一五日であった。

法王境界線

この時、法王アレキサンダー六世(Alexander VI, 1492-1503)は、イベリア半島両国家、スペインとポルトガルが地理的世界発見に乗り出して、その活動範囲を広げ、お互いに勢力争いを演じる危険の大きくなったことをうれいて、法王裁定の形でこれら両国家の勢力圏をきめようとし、一四九三年三月スペインのイザベラとフェルジナンド二世の両王に二個の法王教書を与へた(Papal Bulls)。一は、発見された西印度諸島(現在名)と将来発見さるべきその周辺諸島を両王に帰属させるとするものであり、他は北極、南極を結ぶ線に副う、アゾレス群島の西一〇〇リーグ(一リーグは約三哩)の線によって二つのイベリア半島国家の間に西方の未発見地を適当に割り当てるといふものであった(一四九四年境界をベルデ岬西方三七〇リーグの南北線に改定)。

論

コロンブスの第二回航海

スペイン王はコロンブスを再度の航海にのぼらせ、彼は一七隻の帆船と一千名から一千五〇〇名といわれる乗組員を引つれて一四九三年九月二五日カデズから出発した。しかしこの一七隻は、一三隻が報告と輸送の爲後にスペインに帰っている。第二回航海は第一回より順調で、一行は一月三日にカリブ海の島影を発見している。この航海でコロンブスはドミニカ、マリー・ガランテ、グアダループ、プエルトリコ、ジャマイカ等を発見している。しかしコロンブスは、これらの島の中、かれらの本土の発見にとめた。彼は結局キューバが、その本土であると結論づけたとされる。新航海は全く植民者としての開発のそれで、この点種々の圧迫を現地住民に課し、争闘で彼等を抑圧し、一四九五年三月以降五〇〇人の奴隷をとらえて本国に送達している。しかし第一回航海で、彼がハイチに残したスペイン人はその基地から一掃されていた。コロンブスは航海家、医師、農民、スペイン小貴族 (hidalgos) 等々を伴っていたが彼等との協調関係は必ずしも順調でなく、結局これが原因で彼は自分で帆船を現地で建造してスペインに帰っている。一四九六年三月一日であった。この頃には、カリブ海諸島とスペインの航海は必ずしも不安定なものではなくなっており、両者の間を使節船が往来していた。コロンブスがカデズに帰投したのは六月一日であった。

その後コロンブスは尚二度の航海(一四九八・五一・一五〇〇・一一、一五〇二・五一・一五〇四・九)をハイチ(Haiti-Españolaと命名されていた)に行うが、その都度乗組員や部下の叛乱に会い、その地位を王によって剥奪され、新らしく任命された法執行官(Francisco de Bobadilla)のために逮捕されるという厄にあい、またそこでの全財産を取り上げられるという悲運に際会している。最後、失意の中にスペインに帰着した彼は両王に暖かく迎えられ、地位は回復されず、一五〇四年一月二六日イザベラ女王の死にあい、疾病と老齢に悩みながら一五〇六年五

説

月一九日にこの世を去った。彼の事蹟とその後の影響の評価については、ここに諜々する迄もなからうが、彼は偉大な探検家でまた植民地開拓者ではあったが、決してよき執政官ではなく、また強いキリスト教的イマジネーションの中に暮らす人物であった。これが彼に行動への動力とまた災をもたらしたと考えられる。人の和よりも天啓にたよったのである。彼は現地 (Cape Graciosa Dios) からガンヂス河迄一〇日間、と両王に書き送っている。またスペインがエルサレムを奪回するのだと信じており、第三回航海でベネズエラのトリニダッドを発見した時、オリノコ河をみてこれぞパラダイス四河川の一つだと信じ込んだと言はれている。

マゼラン (Magellan, Ferdinand, Portuguese Fernão de Magalhães; Spanish Hernando de Magallanes,

1480-1521)

コロンブス以降多くの航海家が大洋にあふれ出し、特に英仏の探検家の現地に赴くものは数知れない、と言われた。これが後、英国が七つの海を支配するものとなる。しかしここでは、コロンブスにつきマゼランのみとりあげる。それは小稿に於ては、何度もう様に所謂地理的世界発見が、植民地交易と、その支配の基を築いた事情を叙述すれば足りるからである。マゼランは、ポルトガルの第四貴族階級の出で女王 Leonor の小姓も務めた事があったが、早くに航海活動に従事し、ポルトガル艦隊に加わって東方に赴いた。このポルトガル東方経略は、一五〇五年はじめから始まり、大成功をおさめた。即ち、モスLEM勢力との角逐の中で、マーカンテリズム確立の為に彼等と戦い、インドのマラバル海岸、コーチンからマレイ半島、モルッカ諸島を暴れ廻った。ポルトガルの主要拠点となるゴアは一五〇九年一月二四日にその手中に帰し、この地域支配の中心となるマラッカ海峡の制圧は一五一一年六月末に達成さ

れ、マラッカ市は八月中ば迄に攻略された。これでポルトガルはこの地域にマーカンテリズムを確立し、これによって東方のスパイスをはじめとする豊かな物資がポルトガルをはじめとする西方に流れこんだ。マゼランはこれらの遠征に加わったのであったが、一五一四年一月、彼がリスボンに帰った時、国王マニユエル (Manuel) に彼の功績を主張し彼の年金の増額と位階の昇進を求めた。この要請は二度にわたったが国王はこれを結局拒否した。

こうしてポルトガルに失望したマゼランのスペイン移住が結果する。一五一七年一月彼はスペインに赴いた。そしてポルトガルの天文学者ファレイロ (Rui Faleiro) とつれだってチャールス一世 (Charles I, later Emperor Charles V) に彼等の従属を申出た。法土境界線の西にある領土はすべてスペイン領であるから東方の国々はすべてこれに含まれるというのが彼等の王に向っての主張であった。王はこの意見を聞いてこれに賛成し、その主張によって探検隊を組織した。五隻の船と二六五人の乗組員からなる艦隊が編成された。彼等は一五一九年九月二〇日スペイン (Sanlúcar de Barrameda) を出発した。二六日、カナリー諸島のテネリフに到着、ギネア海岸から西をめざし、ブラジルに向った。一二月一三日、リオデジャネイロに到着、リオデラプラタで河口湾を探検、西へ通じる海峡を発見しようとした。勿論企画は失敗、翌年三月三十一日に一行は聖ジュリアン港に到着した。しかしここでスペイン人乗組員の叛乱にあった。漸くこれを鎮圧、首謀者一人を処刑、他の一人を海岸に放逐して、一五二〇年八月二四日、艦隊は聖ジュリアン港を出発した。漸く所謂マゼラン海峡の入口に到達したのは一五二〇年一月二二日であった。しかしこれまでに艦隊は一隻が座礁で破壊され、一隻が逃散して三隻になっていた。飢え、渴き、壞血病になやまされたことはどの探検隊とも同じであったが、かくして彼等は海峡に入り、行手をはかり乍ら進行。一月二八日、遂に彼等は海峡を通過する事に成功、「南の海」に出た。豪気のマゼランもこれを知ったとき、歓喜に泣き叫んだと言は

説

論

れている。ついでチリ海岸にそって北上したが、「南の海」はおだやかで、これが為、この大海が太平洋と名付けられた。一五二一年一月二四日、そこからなお北西に進路をとり、二月一三日西経一五八度で昼夜平分線を越えた。三月六日グアム島に到達、彼等はそこで九九日目にはじめて新鮮な水と食料を得た。艦隊はインドネシアのモルッカを目指したが、マゼランは、マーカンテリズムの為の一つの基地をそこに到着する前に設定したい意向であり、それを既にしてスペイン王に書き送っていた。三月九日グアムを出発、フィリピン群島に入り、セブ島で、該地の酋長と長老達をキリスト教化した。しかしそこで不幸が起り、現地人との争いが突発した。そしてこの争闘で、世界史上の一人の巨人は命を奪われた。彼は世界史上はじめて太平洋を東から越え、欧州からアジアに到る距離を最短の航海にちぢめた。この航海で結局スペインに帰りついたのは一雙の船と一七名の欧州人、四名のインディアンスのみであった。しかしその船には、香料が満載されていた。

あ と が き

十字軍からイスラム世界とキリスト教世界の対立が、西欧の人々を大洋に向かわせ、それが地理的世界発見となり、マーカンテリズムの確立、植民地帝国の建設とすんで、西欧の近代資本主義の発達をうながした。その経緯をここに概観した。そしてこういった物質的経済の発達と共に、近代資本主義をささえるものは、それだけではなく人々のそれへの適応、即ち、まず経済生活に対する勤勉と節約、神への信仰、科学・技術の習得、そして教育を受ける欲望であることをみた。これら無くしては、近代は無く、市民社会の成立もない。この後者の諸々の要素が、同じ時、同様に大洋に乗り出し、世界を席捲した国々にその後その発展の程度に大きな差異が生じてくる原因である。小論に於

てはこうした近代社会の成立、近代国家の統一、近代資本主義の確立への端緒をみたのである。そしてこの後時代は、右にあげた諸現象の発展に向けて進んでゆく。これらは、市民社会の確立、発達、自由な信仰を求める宗教改革、科学・技術の尊重をめざす意識の改革（ルネッサンス）、そして産業革命への胎動となろう。これにつき稿を新にして新しい努力を傾注したいのが、ここにおけるささやかな筆者の願望である。

(1) Copernicus, Nicolaus (1473-1543) ポーランド生れの天文学者、はじめて、宇宙の中心は太陽であり、その廻りを地球と他の惑星がまわっているという仮説を提出した。クラコウ大学で学んだ後、イタリアにゆきパドワ、ボローニヤ、フェエラ各大学で学び、イタリアルネッサンスの使徒となった。ついでフラウエンブルグ（東プロシアの小邑）に移り住んで、そこで三〇年を過した。職業はキリスト教大聖堂の参事会員（*canon of chapter*）であった。彼の太陽中心説がとなえられたのは、一五二二年であった。これは当然千三百年続いた天動説をくつがえす画期的な主張であり、天動説を信じ説きつづけてきたキリスト教会への叛逆であった。ちなみに天動説の概要は、次の如くであった。deferent \parallel 大円周、環体、従円、epicycle \parallel 小円周、eccentric circle \parallel 離心円（軌道の偏心的な、天体が離心軌道を移動する）。プトレマイアシステムは、地球が宇宙の中心であり、定期的円運動で惑星の運動法則を正確にはかるうとする考え方であった。太陽の動きは、それを一年間かけて昼夜平分線—例えば春分、秋分—から昼夜平分線にかけて、その中心が大円周の廻りを規則的に廻る小円周の上に置くことによって正確に知られるとした。大円の中心は、地球の中心とびったり一致した。この天動説に対してコペルニクスは地動説を主張したのであるが、彼の理論は、本質的に数学的ではあったが、その方法論は、伝統的なものであり、彼の態度は保守的であったとされる。従って彼はこの理論を数学的に証明することが出来ず、それはガリレイとニュートンの業績にまたねばならなかったと言われる。コペルニクスのこの理論 *De Revolutionibus Orbium Coelestium* が出版されたのは彼の死の一五四三年であった。コペルニクスは、ガリレイと数学者ヨハン・ケプラーによって地動説の元祖とされた。

(2) *The Foundations of Early Modern Europe, 1460-1559*, Eugene F. Rice, Jr. 1970, p. 160. 都市国家、公国、王国

等の政府は、彼等の領土内に宗教的統一を強行した。或ものは急速に成功し、あるものはただ除々に進むのみであった。支配者の宗教的偏好が市民や従属者の宗教信仰を圧伏した。

- (cc) A Farewell to Marx, David Conway, Penguin Books, 1987, pp.21-45. Hegel's Theory of the Modern State, Shlomo Avineri, Cambridge Univ. Press, 6th Reprint 1989, pp.25-26. 帝国の下の市民は、全体の為に働くという心構えは失われ、市民は、自分を越えた何かを認識することのない私人となる。……ポリス (Polis) に於ては、市民は彼自身の廻りにある政治的文化の中に彼自身のひろがりを見る事が出来、ポリスの仕事、その構築物や制度の中に不滅の自分を認める事が出来る。帝王の下では、個々人の生活は、個人が政治システムへの一切の参加から疎外された状態の中の現実としてのみある。

- (4) Mediaeval History, by C. Stephenson, revised by B. Lyon, Harper & Row, 4th edition 1962, pp.150-57. Eugene F. Rice Jr., op.cit., pp.106-13.

- (5) An Economic History of Medieval Europe, N.J.G. Pounds, Longman, 2nd ed. 1994, p.290. 都市工人は組合 (confraternity) 或いはギルドに組織された。中世社会はこれら組織団体に支配されていた。これらは慈悲、教育、慈善 (eleemosynary)、宗教等種々の目的をもつものに分れていた。田園的な互助、親縁関係が都市のこれら団体に見出された。彼等は同じ教会に所属していた。生活面では同じ市場で買い、これらの商人、各業者と親密な関係を結んでいた。慈悲、慈善、宗教、経済的色彩が大なり、小なり、彼等の間にあった。人、社会、価格、利潤に対する宗教的教えがまた彼等を支配していた。

- (6) Medieval Europe, Maurice Keen, Penguin History, 1968, pp.229-31. ギルドの組成員は世襲となっていた。この為人々は疎外された。外からの組成員は、重要な役割を与えられなかった。これらの組成員は、団結して賃銀の高騰をはかり、条件の改善を求めた。親方達は、これらを禁止した。工人は宗教目的を口実にして反抗した。これが叛乱に迄高まり、ギルド体制にひびを入れていった。こうした事例は、フロレンスやフランドーズ諸邑に屢々起った。

- (7) See "The Rise and Fall of the House of Medici", Christopher Hibbert, Penguin Books, 1974.

- (8) Max Weber on Capitalism, Bureaucracy and Religion, A Selection of Texts, ed. by Stanislaw Andreski, G. Allen & Unwin, 2nd impression 1984. これに従ってトマックス・ウェーバーは、資本主義を歴史の各時代を通じて認め

- ていて、勿論中世資本主義という言葉も使っており、古代社会の資本主義とか、資本主義の萌芽という言葉も使っている。利益を目的として貨幣(金)を集め、これを商業、金融、工業等に用いることを広く資本主義として認識している。
- (9) The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism, Max Weber (1864-1920), Routledge, reprinted 1992, pp.48-52. Stanislaw Andeski, op.cit., pp.111-113. 「プロテスタントティズムの倫理と資本主義の精神」岩波文庫。マックス・ウェーバーは、ここでまた正直と信用の大事さを強調している。またヤコブ・フッガーが、引退する様求められ、他人々に機会を与えるべきだと言われたのに対し、自分はそうは思はず、出来る限りはもうけるのだと答えた事が、資本主義の精神としてわかりやすく説かれている。
- (10) 「日本永代蔵」西鶴名作集下巻、日本名著全集第二巻、昭和四年刊。
- (11) 「心学早染草」山東京伝、黄表紙廿五種、同右第一一巻、大正十五年刊。
- (12) Max Weber, op.cit., pp.52-78.
- (13) Documents of German History, Editor L.L.Snyder, Rutgers Univ. Press, 1958. pp.28-29. A History of France, A. Maurois, Methuen, 1966 reprinted, pp.42-43. シャルローネ大帝の息子ルイ敬虔王には三人の息子がおり、これが神聖ローマ帝国を三分した。神聖ローマ帝国はその勢力範囲を拡大した為、通交力を欠き、統一が弛緩し、船舶、軍事力を欠いて衰退していったが、ルイ敬虔王の没後、三人の息子は相争い、八四三年に到って、ベルガンの和約を結んで一応争闘を解決した。彼等の一人ローセイヤ(Lothair I, ロタール一世)は、帝号をとり、帝国中央部を北海からライン河に副って、ローマ迄の領地を得た。チャールス(Charles the Bald)はほぼ今日のフランスを、ルイ(Louis II)は、今日の独逸両国にはば匹敵する領地を獲得した。これが大略、その後のフランス、ドイツとなる。
- (14) Turkey, Roderic H. Davison, Prentice Hall Inc., 1968, pp.15-49. トルコ民族の発祥は不明瞭とされる。それはウラルアルタイ語族の一部と言われるが、種族的にはウラル語族とアルタイのそれらとの関係は稀薄とされている如くである。しかし彼等がモンゴル、満州、ブルガルそして多分フン族等のアルタイ諸族の一派であったことは明らか様である。その発生の地は、外蒙古、バイカル湖の南・ゴビ砂漠の北と考えられる。トルコ族として最初に彼等が現われるのは六世紀であった。その領地は東トルコ王国としてバイカル湖に注ぐオルホン河を中心とした。他の一派はそこから離れ、トルキスタンに入って一時王国を形成し、所謂シルクルートを睥睨した。彼等の信仰はシャーマニズムと言われたが、七世紀、アラブがい

ランを征服すると共にイスラムが伝播し、彼等もこの宗教に吸収されていった。トルコ戦士が、多くイスラムの支配者に雇われ、イスラムに改宗した。トルコ族のイスラム化は一〇世紀に完成される。セルジューク (Seljuk) 王にひきいられたセルジューク族はスンニ派となった。他はトルコマンと称され、イラン、イラクに行われたシャイト (Shiite, シーア派) 派となった。後者は大衆の伝導と神秘主義にいろどられていた。これら二派が、トルコの以後の歴史に甚大な影響を及ぼす事は言うまでも無い。

- (15) *ibid.*, p. 18. Arab-Turkish Relations and the Emergence of Arab Nationalism, Z. N. Zeine, Greenwood Press, p. 128. モハメッド (Muhammad, 570-632) とその四人の直系の子孫から選ばれるイスラムの教主。モハメッドの死と共に Khalifat Rasul Allah i.e. Caliph (or successor) of the Messenger of Allah が生れた。それは、予言以外のイスラム国家の全責任をこなすものであった。初代のカリフは Abu Bakr であつた。その後カリフは種々の変遷を辿るが、Omayyad Dynasty (661→)、Abbasids regime (750→) のそれらが名高く、後者の時、バグダッドが帝国の首都とされた。トルコ族が頭角を現わすのはこの時で、セルジュークの首領 Tughrul Beg は勢威漸く衰えた Abul Abbas に比べ、五万の兵を以て実質上バグダッドを制圧してしまつた。そしてカリフの権威と名目的権力を回復し、カリフからサルタン (Sultan) の称号を贈られた。この後カリフはトルコ族に支えられて、その力と意向によって存続することになった。バグダッド・カリフが最終的に亡んだのは一二五八年であつた。その後カリフはエジプトに移つたがマメルーク (Mameluke) 支配が終焉したのはトルコ族によつてであつた。(一五二六—一七〇一年) 一五二〇年に最後のエジプト・カリフがそのタイトルをソリマン一世 (Solyman I) に譲渡した。以来カリフの称号は、一九二三年に至る迄トルコ王族によつて占められることとなった。

- (16) *Atlas of the Islamic World since 1500*, Francis Robinson, Equinox (Oxford) Ltd., reprinted 1989, pp. 40-43. イスラムには五つの戒律がある。①一神 ②祈禱 ③施し ④巡礼 ⑤ラマダン (Ramadan) の断食。そして六番目として不信心者に対する聖戦 (jihad)。しかしイスラムが左手にコーランを右手に剣をもつて世界にのぞむという説は誤りである。ちなみに言えば日本の一九九四年は、不戦が憲法上誓約されている。イスラムに於ては、この戒律は、コーランに誌されていないというが、すべてのセクトが守っている。日本の不戦の戒律は憲法に明記されているが、これは守られるのであろうか。これらイスラムの中、モハメッドの慣習 (sunna) に従う人々がイスラムの多数派を形成してスンニ派と呼ばれ

た。彼等は最初の三人のカリフを合法的支配者とした。これに反し、シーア派に属する人々は、彼等を篡奪者とした。シーア派は第四のカリフ・アリ (Shi'at Ali) を以てその正当な第一の支配者としている。彼は予言者の従弟であり、Husain と Husain の親であった。これらは予言者の娘 Fatima に承認された。彼等は相互に多くのセクトが王朝をたてまた亡んだ。二〇世紀後半に於て、シーア派は全モスレムの一〇分一を形成すると言われ、(四千万人)、イラン、イラク、イエメン、シリア、レバノン、東アラビア、北インド、パキスタンのイスラム教徒がこれに属する。シーア派はアリの王政復古を願っているが、実現していない。イスラムには僧侶は存せず法家がそれに近い。判事 (Kadi) が正義を判定する警察の長であり、市場の監督者であり、また学校で異端を取締る管理者でもある。人が墓に運ばれた時、二人の天使があらわれ、宗教を問う。イスラムと答える事が出来れば、彼の魂は平安であるが、そうでなければ激しい苦痛を与えられる、というのが彼等の信仰の一部である。

(17) キリストが十字架上の死を遂げ、その復活迄の期間葬られていたとされる聖なる墓所。「コリント書」によればイエスは刑死後三日にして生き返ったとされ、「聖福音書」によれば、聖母マリヤたちが、イエスの死後三日目に墓を訪れたときイエスの屍体がなくなっていた、という。聖墓所には今日「聖墳墓教会」がたっている。場所はローマの処刑場ゴルゴダの丘。イエスはここで二人の罪人と共に処刑された。この教会の礎石を据えたのが、コンスタンチン王であった。今日の教会の基礎は、十字軍によって築かれたとされる。ここには、ローマ・カソリック、アルメニア教会、ギリシア正教、コプト教会等六つの宗派が夫々の礼拝所を設けている。

A History of the Crusades, volume I, the first Crusade and the Foundation of the Kingdom of Jerusalem, Steven Runciman, Penguin Books, reprinted 1991, pp. 110-16. ウルバン二世の呼びかけに対する反響はすさまじく、皇帝ヘンリー五世から、各大公、公、侯、伯爵の貴族もこれにむらがつて応じたといつてよく、都市では、海軍を以て、いち早くゼノア等が企てて参加した。法王は各地を遊説し多くの賛同を得た。スコットランド、デンマーク、スペイン等からも人々がこれにはせ参じた。新婚の夫が新妻の許しを得ずに参加することは無かった、という。全欧が十字軍にわきたったといつて過言では無かった。

(18) Max Weber and Karl Marx, Karl Löwith, George Allen and Unwin, 3rd impression 1986, pp. 12-14.

(19) Time, June 15, 1992, vol. 139, No. 24, pp. 18-25. Islam in Encyclopedia of World Religions, Octopus Books Ltd,

1975, pp. 98-106.

(20) The Outline of History, H.G. Wells, Garden City Publishing Co., Inc., 27th reprint 1981, pp. 639-40.

(21) Steven Runciman, op. cit., the First Crusade, pp. 299-314. 一〇九九年エルサレムを占領した時の十字軍の勢威は当るべからざるものがあり、そこに早くもラテン・キリスト教国家が打建てられた。それはエルサレム、アンチオーク、エデッサ、そしてトリポリであった。これらは最終一二八九年（トリポリ伯爵領の終焉）まで続く。エルサレムでは①王は高等法院 (haute cour) で選ばれそのメンバーによってその第一帝と認められる。②諸海港に於けるイタリア植民地は殆んど独立の治外法権が認められる。それは諸海港征服の為の海軍的援助に対するみかえりである。③軍隊として三種の騎士団をもつ。テムブラー騎士団、養育院聖ジョン騎士団、そしてチュートニック騎士団である。エルサレムは、八八八年間フランス族の国家として栄えた後、一一八七年イラン系イスラムのクルド人の将軍サラジン (Salah-al-din Yusuf ibn Ayyub) に占領せられた。

(22) A History of the Crusades, vol. III, the Kingdom of Acre and the Later Crusades, S. Runciman, Penguin Books, reprinted 1978, p. 171 & the following and p. 427 & the following. エルサレムがサラジンに占領された後も屢々その城主をかえて、キリスト教世界とイスラム世界抗争の中心となるが、更に重大なコンスタンチノーブルは、第四回十字軍によって一二〇四年四月一二日に回復された。エルサレムは両者間一旦和解の対象となることもあったが、それは成就せず、戦闘と外交の効果として一二二九年、第六回十字軍のフレデリック (後に独帝 Frederick III) によって奪回された。しかし、それも一二四四年にエジプト・トルコ共同行動によってイスラムに奪いかえされている。この為第七回十字軍が実行されたが、首将フランスのルイ九世が強行策によって、捕虜になるなどあって成果は上らなかつた。彼は莫大な金額の身代金を支払い占領地も返還して開放される。ルイ九世は再挙を図るがそれは、フランス本国からも、法王庁からも支援されず、失意のまま最後彼は孤影悄然とフランスへかえる (一二五四)。彼の失敗に対して人々は、神の恩寵は、十字軍をはなれたと感じ、またそう噂した。法王庁はこの時、十字軍を東方に展開する情熱を失い、欧州に於ける法王への敵対者をこらしめる為に利用していた。例えばこの時インノセント四世は独王コンラッド四世 (Conrad IV) に対する十字軍に支援を与えていた。ルイ九世が東方に軍を展開していた時一大異変が引き起こされた。それは蒙古の中近東への襲来であった。一〇年後には日本にも襲来しはじめる蒙古民族は、この時、バグダッド侵寇に成功し、ここを占領して (一二五八)、最後の

アッバシッド・カリフを殺害しイスラム世界を驚愕させる。彼等は一二六〇年には、アレppo、ダマスカスにも侵出し、ついでイスラムに対するモンゴルの決戦をせまった。この天下分け目の世界的な一戦はナザレ近傍のアイン・ヤルトで行われた。一二六〇年九月三日であった。この決戦にイスラムは最後の勝利を収めて中近東、エジプトのイスラム教の安泰を確保する事が出来た。このときイスラムの前面に現れるのはエジプトでマメルーク族 (Mamlukes) と守将バイバル (Baybars) であった。バイバルはサルタンとなってその後も力を振りハイファ (一二六五)、アンチオーク (一二六八) をキリスト教民族から回復する。クリスチャン九世は尚、聖地回復の望みを捨てず、一二六七年に第八回十字軍を興す。しかし戦雲利あらず、この時王は、チュニジアで足をとられ聖地に達する事さえ出来ず、そこで果てる (一七二〇)。その後は、一瀉千里にイスラムの勢力が、フランク、ラテンの拠点を奪いかえてゆく。曰くトリポリ (一二八九)、曰くアクレ (一二九一)、チール、ベイルート、タルトウス、アースリット、そしてシドンであった。この時これらはシドンを除き進攻イスラム軍に何等抵抗らしき抵抗を行わなかったという。十字軍進発してより二〇〇年、遂にラテン諸族はイスラム教世界の力によってその進攻をたたれ、豊かな、夢の東方への道を開くことが出来なかったのであった。地中海に於けるキリスト教軍最後の砦となったロードス島の聖ジョン騎士団とサイプラスのフランク王国は夫々一五二二年、一四八九年に亡んだ。そしてベネチアの拠点は一五七一年にその聖なるクルスの旗を下ろした。

- (23) H. G. Wells, *op. cit.*, pp. 681-87. トルコ人は、征服したキリスト教徒を武装解除し、イスラムに改宗させていったし、彼等を徴税の対象とした。そして軍隊はキリスト教民青年層から募集し、その数は一年千名に達していた。彼等のイスラムへの改宗は最初義務的とされず、徐々にそうし向ける政策をとった。きびしい規律と充分な報酬でこの軍隊は、当時備兵制度の中で一際ぬきんでたものとなっていた。こうしてトルコは征服を成功させるが、ビザンチン王族と対立しつつも友好親密をつなぎ、婚姻関係も結び屢々その軍と戦闘をたすけさえするという複雑な関係を維持した。オットマントルコの版図は、東はタウルス山系から西はハンガリー、ルーマニアにも及ぶ。コンスタンチノーブルは、トルコに自由港、市場、世界金融センター、金のプール、為替取引所をもたらし、トルコの財政はこれによってうるおった。しかしその陰で陰謀と買収と裏切りが盛んに行われ、コンスタンチノーブルに腐敗がうずまいた。複雑な金融制度が衰え、市場が枯渇し、教養と文明が消えていった。モハメッド二世は一四八一年に没するが、帝国そのものは尚強大となり、セリム一世 (Selim I, 1512-20) は予言者マホメットの聖族と遺品を入手し、全イスラムのカリフ (Caliph of all Islam) となった。スレイマン大帝

(Suleiman I, 1520-66) は、その版図を更に拡大し、東ではバグダッドを手中に収め、西ではハンガリーの大部分を征服した。ウィーン城下の誓いさえたてられそうな勢いであった。尚艦隊を以てアルジェーをとり、ベネチアをおびやかした。王はフランスと同盟しておりオットマン帝国の最盛期を画した。

(24) 「大航海時代叢書」という岩波書店発行の全集があり、一二巻で一九六七年第一次刊行がなされているが、その中の「西アフリカ航海の記録」という書物には、「モウロ人、アフリカ海岸諸地方の住民」が当時(一五世紀)、ポルトガル人や、その一隊に襲われてとらえられる有様が生々しく記述されている。四十五人をとらえ多数が死んだとか、三十六人をとらえ数名が死んだとかいわれている。これを果したポルトガルの従士達は、本国で大いに賞賛され、歓迎されたという記述もある。